

第四三八回 青葉会 令和四年十月二十七日(木)(於…三軒茶屋しやれなあど会議室)

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ

西澤國護 長谷見びん 星田啓子 山崎亜也

投句・選句

伊賀山そらお 熊谷國男 後藤とみ子 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏

土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子

山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

十一點 ふるさとの秋を探しに行く切符 孤舟 (○と・千・恵・孝・た・清・雅・隆・
び・允・○昇)

九點 ◎どんぐりを栗鼠のまなこで探す子ら とみ子 (紀・○孤・健・堂・ゆ・○允・啓・
け・○盛)

身に入むや古き良き世のスロージャズ 恵洲 (紀・と・そ・健・び・正・規・○正・
龍)

八點 ◎廃線論知るやU51汽笛呀ゆ 健介 (紀・孤・○敏・堂・び・正・啓・盛)

ホスピスへ入るとメール桐一葉 堂哉 (紀・忠・○健・隆・允・け・天・盛)

◎金色の棚田彩る曼珠沙華 規雄 (紀・孤・○敏・○康・ゆ・雅・昇・盛)

七點 ◎篁に色無き風の葉音かな くに お (紀・孤・康・啓・亜・允・規)

京の宿窓に切り取る紅葉狩 啓子 (紀・た・清・堂・ゆ・國・昇)

あちこちに名もなき古墳奈良の秋 けい子 (紀・忠・五・國・正・規・天)

六點 老いてなほ美しき人あり枯そうび 忠彦 (紀・健・孝・○龍・國・亜)

◎秋澄むや盲導犬いるコンサート 千恵 (紀・忠・孤・と・正・天)

◎菊人形恨み晴らせぬまま枯るる 康敏 (紀・孤・千・清・○堂・○三)

この道を行けば法起寺賜日和 全 (紀・恵・昇・け・亜・天)

松手入れ父の手順と同じ兄 けい子 (紀・忠・恵・○隆・允・亜)

五點 太郎冠者朗らに笑ふ菊日和 とみ子 (紀・五・恵・啓・け)

大仏の螺髪に小鳥来て止まる 昇 (紀・く・千・恵・康)

行く秋の脆き平和へ曾孫抱く 盛雄 (そ・紀・○恵・雅・正)

成田山奉納歌舞伎

四點 ◎海老蔵に喝! 鬘肩やめよか夜寒道 紀久男 (孤・と・雅・允)

絵硝子のランプシェードの夜長かな 孤舟 (紀・康・び・規)

栗を剥く古代の人もかくあらん とみ子 (紀・五・千・規)

トーストにバター塗る音朝寒し 千恵 (紀・と・啓・○亜)

◎アデイシヨナルタイムのゴール天高し
 寄す波に紅葉照り映ゆ瀬戸の島 康敏 (紀・孤・堂・び)
 秋高き富岳を望み精気満つ 全 ゆたか (○そ・紀・く・た)
 ほろほろと末世をなくや虫の闇 全 (紀・く・た・敏)
 蔵人が持ち帰るとなむにこり酒 全 びん (そ・紀・敏・正)
 全 亜也 (紀・五・龍・三)

三点

金木犀夕日の中を散り続け そらお (紀・康・國)
 背広着て孫との写真七五三 忠彦 (紀・隆・天)
 毒舌の円楽逝くや花野道 全 (紀・た・隆)
 天高く白線一本飛行機雲 全 (紀・敏・隆)
 新酒酌む嗜む程と言ひながら 全 堂 (堂・龍・盛)
 ◎秋冷の城の鯨天に吼ゆ 孤舟 (堂・龍・盛)
 歳月やほっこりとこの土瓶蒸し 全 全 (紀・孤・ゆ)
 秋の空ノックの子らの声弾む 全 全 (紀・孝・敏)
 小諸なる古謡身に入む入日坂 全 千恵 (紀・く・○規)
 囚われの魚の秋思や磯溜り 全 全 (紀・清・昇)
 赤とんぼ電波の遠き島に舞ふ 全 全 (紀・五・啓)
 薬師寺で琵琶聞き終えて後の月 全 全 (紀・清・壱)
 全 けい子 (紀・と・千)

二点

耳痛き「予後お大切に」古酒味わふ 紀久男 (健・龍)
 菊之助の「大物浦(だいまつものうら)」の場

冷まじき知盛最期息を呑む 全 (く・け)
 入魂の旨(めしひ)ピアニスト秋深む 全 全 (健・ゆ)
 コロナゆへ身内で葬儀菊の花 忠彦 (紀・び)
 秋思とは曇り硝子の透明度 孤舟 (○孝・三)
 小鳥来て水の匂の羽畳む 全 全 (○五・三)
 留守電の返事待つ昼秋深む 全 全 (そ・紀)
 七島は煙りの中に雁渡し 全 全 (紀・三)
 ゴダールは尊厳死らし秋夕焼け 全 全 (紀・壱)
 磯の香を軽やかに揚げ秋の宴 全 全 (紀・ゆ)
 秋澄むや小網神社に銭洗ふ 全 全 (紀・ゆ)
 寝もやらず読み止し本を長き夜に 全 全 (紀・康)
 あげ道に深紅の花や早稲を刈る 全 全 (雅・國)
 ◎雲走り顔を隠した十三夜 全 全 (紀・く)
 すつきりと晴れて夕暮れ虫の声 全 全 (紀・孤)
 秋夕焼鷗尾の煌めき大極殿 全 全 (國・規)
 お持たせの松茸うれし明日の夜 全 全 (紀・昇)
 この寒さ冷酒切り替え爛をつけ 全 全 (紀・千)
 秋祭太鼓音静か遠くから 全 全 (た・敏)
 刈り残る葡萄ににじむ日の疲れ 全 全 (孝・敏)
 秋風の編まれて季節うつろひぬ 全 全 (紀・三)
 清けしや楽の音紡ぐ白き指 全 全 (紀・清)

小さくともこの手ありしか秋刀魚飯
磨りガラス越しにぼんやり芙蓉咲く
琉球の古酒との出会ひ禁酒解く

亜也 (紀・忠)
天牛 (紀・孝)
盛雄 (紀・龍)

一点

台風の行方気になる診察日

そらお (紀)

両陛下沖繩戦没者慰霊の旅

鎮魂の沖繩巡り冬迫る

紀久男 (忠)

鍵失せて締め出されたり宵寒し

千恵 (そ)

三冠でシーズン終わる九月尽

ただしげ (紀)

爽やかや若きかの棋士この選手

恵洲 (け)

コスモスも我もゆれたり温さ待ち

雅夫 (紀)

コスモスの街道沿いて千曲川

國護 (紀)

文化祭残る思い出セピア色

全 (紀)

絵画館イチョウ並木の夕陽さし

全 (紀)

鶏頭や「宝塚」めく散歩道

正明 (紀)

正常化50周年菊薫る

全 (紀)

所在無げに鳶一羽舞ふ秋の浜

昇 (紀)

贖ひし柿の葉寿司の紅葉して

啓子 (紀)

落蟬や七年七日の吐息つく

全 (紀)

しんかんと棚田の中の曼殊沙華

規雄 (雅)

今更に柿のやさしさ有難さ

亜也 (紀)

ただならぬ欧州情勢冬仕度

全 (紀)

貼りたきは他家の二階の破れ障子

全 (紀)

嬌声に踊り子の四肢宙を舞ふ

盛雄 (紀)

(宝塚にて)

十月の暦はお化けハローイン

天牛 (紀)

※※※※※

【句評】

※が付き一字下げたコメントは、採ってはいないものの、気になる点を記したものです。

十一句

ふるさとの秋を探しに行く切符

とみ子さん・・・このお句のような帰郷は、素敵ですね。

千恵さん・・・秋は探したり見つけたりするものなんです。故郷へ帰る嬉しい気持ちが

「切符」に現れているような気がします。

恵洲さん・・・ちいさな切符を主語に持つてきた着眼点を買う。

ただしげさん・・・夏は帰省できず、秋になって漸く故郷へ帰る。懐かしさと久しぶりの故郷

の秋を楽しもうとする気持ちが感じられる。

隆さん・・・コロナで帰省できなかった古里の秋を認みたい気持ち。

昇さん・・・コロナ禍の間、故郷の広島には帰らずじまい。掲句に触発され、無性に

宮島の紅葉が見たくなりました。切符を買いに行きます。

天牛さん・・・旅という言葉を使わずに切符できめるのはうまい。

九点句

どんぐりを栗鼠のまなこで探す子ら とみ子

孤舟さん・・・団栗が好きな栗鼠の眼になれば、団栗をたくさん拾えるだろう。

堂哉さん・・・中七が利いています。

ゆたかさん・・・懸命にどんぐりを探す子どもらの姿が浮かびます。

允章さん・・・中七の措辞が真に上手い。一生懸命団栗を探す子供達の可愛い姿が見える。

盛雄さん・・・中七の「栗鼠のまなこ」がこの句を佳句にしました。熊が出て来なくて

よかったですね。

身に入むや古き良き世のスロージャズ 恵洲

とみ子さん・・・古き良き時代を懐しむお気持ち伝わります。

健介さん・・・確かに良かった！若い人の身には入まない世界ですね。

正明さん・・・現代は音楽が低調ですね。

龍平さん・・・学生時代水道橋のジャズ喫茶SWINGに一人で行きよく聴いた。由井正一氏と言う名評論家が偶に來られて今も懐かしき思い出。丸紅に入ったら繊維に氏の弟さんが居られた。トシ取るとジャズも良いです！

八点句

廃線論知るやD51汽笛呀ゆ

健介

孤舟さん・・・間もなく役目を終えることを知らないD51は、今日も懸命に汽笛を鳴らし続けています。

敏郎さん・・・オールドファンには何とも懐かしい響き。

堂哉さん・・・確かに廃線の情報の威力は凄いですね！下五は外連味がなく素敵です。

盛雄さん・・・何はともかくD51の汽笛は懐かしい。少年時代を想ふ嬉しい一句。

ホスピスへ入るとメール桐一葉

堂哉

健介さん・・・己も最後はホスピスに入るのだろうか？入って友にメールで報告するのだろうか？ かく重き句を詠めるだろうか？

隆さん・・・急な痛みに医師が対処でき安心できる環境と切り替えるべきか。

「ホスピスへ入るメールや桐一葉」がいい。

盛雄さん・・・ご家族でしょうか、友人でしょうか、心静かに死に臨む知らせ。辛いものです。

天牛さん・・・桐一葉で心に沁みます。

金色の棚田彩る曼珠沙華

規雄

孤舟さん・・・金色に穂を垂れる稲と、畦を彩る真っ赤な曼珠沙華。

敏郎さん・・・何ともゴージャスな取り合わせ！

康敏さん・・・能登千枚田を思い出した。黄金の稲穂そして畔には満艦飾の曼珠沙華の緋色が秋の日に散りこぼれている。但し、類句が多そうだ。

ゆたかさん・・・金色の稲穂と赤い曼珠沙華の美しい景色が目には浮かびます。

盛雄さん・・・休耕田の多い棚田。古き農村の山の田の景が滲み出る佳句。金と朱の取り合わせが良い。

七点句

篁に色無き風の葉音かな

くにお

孤舟さん・・・竹林の葉騒は秋の侘しさの象徴。

康敏さん・・・竹藪に秋風が吹き込み、ざわざわと音を立てている。何ということも無い風景だが、「色なき風」で寂寥感が漂う。

京の宿窓に切り取る紅葉狩

啓子

ただしげさん・・・京の宿で、この風景。中七が良い。
堂哉さん・・・窓越しの景色が目には浮かびます。丸窓かな？四角かな？
ゆたかさん・・・「窓に切り取る」表現で状況がよくわかります。

あちこちに名もなき古墳奈良の秋

けい子

五郎太さん・・・南大阪には巨大古墳がありますが、奈良は王たちや天皇などの小振の古墳が目立ちます。神武天皇陵もあまり大きくないのがいいですね。
天牛さん・・・百済の人々が大和川をのぼり、たどり着いた我国「ウリナラ」です。当時の人のお墓が本当に沢山あります。

六点句

老いてなほ美しき人あり枯そうび

忠彦

龍平さん・・・このような様になる高齢者はよく居られます。女性でナニがイケる方なら特に素敵。
ようで、どちらでもいいのかも。

亜也さん・・・漢和辞典で調べると薔薇は「さうび」ですが、子規に「そうび」の用例がある

秋澄むや盲導犬いるコンサート

千恵

孤舟さん・・・視覚障害者の研ぎ澄まされた聴力は素晴らしいだろう。
とみ子さん・・・盲導犬のけなげさには、本当に感心します。

天牛さん・・・盲導犬をおいたところで、コンサートホールの静寂さがよくわかります。
菊人形恨み晴らせぬまま枯るる

康敏

孤舟さん・・・菊花展に展示された「曾我十郎」は密かに仇討ちを企んでいたが、生憎相手の「工藤祐経」は出品されなかった。

堂哉さん・・・長年見ていません。関西では枚方公園が有名でした。今もやっているかな？
ユーモアのセンスを感じます。

三恵さん・・・「犬神家の一族」を思い出し、おどろおどろしさが蘇りました。
この道を行けば法起寺 賜日和

康敏

恵洲さん・・・飛鳥の秋を詠むのに賜日和の季語がとてもよくマッチしている。さりげなく地味な句だが好感を覚える。

亜也さん・・・ちよつと小振りの三重塔の、秋空をバックにした遠景が浮かぶ。
天牛さん・・・賜日和がぴったりです。

松手入れ父の手順と同じ兄

けい子

恵洲さん・・・「兄貴も親父似で無口な二人が」という歌謡曲を思い出させる、家族を安易に詠む句の多い中で共感を覚える句。

隆さん・・・弟か、妹か、兄への愛情が現れている。盆栽は「松に始まり、松に終わる」という。普遍的な愛情表現である。

亜也さん・・・言外にある、家を代々受け継いでいる感が好ましい。

五点句

太郎冠者朗らに笑ふ菊日和

とみ子

恵洲さん・・・こういう明るい朗らかな句は希少価値の感あり、狂言の笑いが菊日和にぴったり。

啓子さん・・・なんとも闊達で平和な雰囲気醸し出す句。季語の斡旋が素晴らしいです。
紀久男・・・松緑がはまり役で、気持ちよく歌舞伎座を後にしました。

大仏の螺髪に小鳥来て止まる

昇

くにおさん・・・大仏と小鳥来るの取合せが面白いと思う。この句で、「止まる」は必要だろうか。「小鳥来る」で十分な気がする。

千恵さん・・・大きな大仏の頭にちよこんと止まっている小鳥がとても愛らしいです。

恵洲さん・・・大きな大仏とごく小さな小鳥の対比に加え、仏の生き物への愛まで感じさせる。

康敏さん・・・歳時記によると、「小鳥来る」とは秋に北より飛来する小鳥とある。大仏様の頭上で長旅の疲れを癒やしているのだろうか。

行く秋の脆き平和へ曾孫抱く

盛雄

恵洲さん・・・孫やひ孫の世代まで平和が続くようにという、祈りに似た老人の願いに共感。紀久男・・・中七の措辞が佳く長寿時代の曾孫も効果的。

四点句

成田山奉納歌舞伎

海老蔵に喝！鼻肩やめよか夜寒道

紀久男

孤舟さん・・・只事ではない。一体海老蔵に何があつたのだろうか。

とみ子さん・・・鼻肩ならではの激励は、役者の糧になるでしょう。

紀久男（自解）海老蔵を襲名するときは成田山に籠って荒行をしておりました。今の海老蔵はスキヤンダル絶えず、演技にも気合が入っておらず、河東節を辞めたい気分です。帰途は暗澹たる思いでした。

絵硝子のランプシェードの夜長かな

孤舟

康敏さん・・・照明を少し落とした部屋、机の上にはガレのランプシェードが明るく灯っている。勿論本物だ。季語の「夜長」で雰囲気醸し出された。

栗を剥く古代の人もかくあらん

とみ子

千恵さん・・・昨今は便利グッズも色々ありますが栗剥く道具は見かけませんね。古代人と同じように現代人も自分の手で剥くしかないのです。「かくあらん」ですね。

トーストにバター塗る音朝寒し

千恵

亜也さん・・・身近な変化に季節の移ろいを感じる繊細かつ鋭敏な感性。

アディショナルタイムのゴール天高し

康敏

孤舟さん・・・ペナルティーゴールで試合を制したチームは鼻高々。

堂哉さん・・・ゴール決まって、おめでとうございます。

寄す波に紅葉照り映ゆ瀬戸の島

ゆたか

くにおさん・・・小島の海辺に紅葉が映えている瀬戸内海の穏やかな景が目には浮かぶ。ただ、調べが「寄す波」でなんとなく窮屈。字余りになるが、「寄する波」の方がゆったりとした感じがする。一層のこと、さざ波とか朝波という手もある。細かい文法の話で恐縮だが、「寄す」という動詞は、①自動詞下二段②他動詞四段③他動詞下二段の3つ活用形を持つ。原句は②で「寄する」は①、どちらも連体形である。

ただしげさん・・・寄せる波に島の紅葉が映り、瀬戸の島々の秋の風景を上手く詠んでいる。
秋高き富岳を望み精気満つ

ゆたか

くにおさん・・・秋嶺富士を眺めながら、自然と作者に精気が漲ってきた。いずこから眺めた富岳だろう。

ただしげさん・・・富士の嶺はいつ見ても、すがすがしい気持ちにさせる。

ほろほろと末世をなくや虫の闇

びん

紀久男さん・・・ほろほろと鳴く虫とは、何という名の虫でしょうか、知りたいですね。

三点句

金木犀夕日の中を散り続け

そらお

康敏さん・・・強い香りを放つ金木犀の花が夕日に照らされ散ってゆく。香りを言わずに

香りを感じさせるところが良い。

背広着て孫との写真七五三

忠彦

隆さん・・・お孫さんへの祝福の気持ちを背広で盛り上げた。

天牛さん・・・暫くタンスの奥に入れてあった背広でしようね。

毒舌の円楽逝くや花野道

忠彦

ただしげさん・・・急に彼岸に。円楽の毒舌が懐かしい。

隆さん・・・毒舌役を演じ尽くした心優しい円楽さん。

天高く白線一本飛行機雲

忠彦

隆さん・・・秋の空に飛行機雲をよく見る。「天高く飛行機雲は一筋に」でも。

新酒酌む嗜む程と言ひながら

孤舟

堂哉さん・・・たまにいますね、こういう人。結構、日本酒にはうるさくて、つまみへの拘りも・・・。

りも・・・。

龍平さん・・・今月はお酒関連の句を4句選びました。先月も旅先の酒は気を付ける積りで

上京。ところが初夜に四年下の柔道猛者呑助殿sと神田で二人酒。s曰く

長野の「真澄」ウマイッス！呑むとコリヤウメエ！二人で「升呑み干した。

翌晚又同じ酒場・・・お客様！「真澄」は品薄でして昨日ので全部デシタと。

盛雄さん・・・愛酒家はなかなかブレーキが掛からないものです。気持ちはよくわかる。

秋冷の城の鯨天に吼ゆ

くにお

孤舟さん・・・当時の城主の権勢が偲ばれる。

ゆたかさん・・・天に吼ゆの表現がいいです。

秋の空ノックの子らの声弾む

千恵

くにおさん・・・ノックを受けている子らの声が弾んで秋天に吸い込まれていくようだ。

規雄さん・・・秋空の下、元気な声を出して守備練習に励んでいる子どもたちをじつと見て

いる作者が微笑ましい。

囚われの魚の秋思や磯溜り

びん

五郎太さん・・・波に取り残された魚を見ての思い、魚自身もこの季節を寂しく思っているか

も知れない。上手な句です。地です。

啓子さん・・・磯溜りに置いてきぼりにされた魚を「囚われの」とした措辞に感性の深さを

感じます。この魚の秋思は同様に自分にもあるのです。

赤とんぼ電波の遠き島に舞ふ

びん

亜也さん・・・「電波の遠き」が離島の表現としてだけでなく、赤とんぼとの組合せの意外さ

もあって、よく効いている。

薬師寺で琵琶聞き終えて後の月

けい子

とみ子さん・・・薬師寺琵琶後の月の3つが揃うと、もの寂びた風情の極みと感じました

二点句

耳痛き「予後お大切に」古酒味わふ

紀久男

紀久男（自解）・・・胃痛才へをして先輩からは酒を控えるよう言われており、どなたから

も快氣祝いのこの好物は届いておりません。一合だけ医者 of 許可を得て飲んでいる次第。

菊之助の「大物浦(だいもつのうら)の場」

冷まじき知盛最期息を呑む

紀久男

くにおさん・・・平知盛は壇ノ浦で鎧二領を身に着けて自ら海に沈んだ。歌舞伎のことは判らないが、息を呑むような壮烈な最期が菊之助によって演じられたのだろう。

季語の「すさまじき」が絶妙。

入魂の旨(めしひ)ピアニスト秋深む

紀久男

ゆたかさん・・・まさに感動のひとつときです。会場の雰囲気伝わってきます。

秋思とは曇り硝子の透明度

孤舟

孝岳さん・・・秋に感じる、何かもの寂しい思いを透明度の低い硝子に同調させる感性が鋭い。「透明度」が効いていますね。

小鳥来て水の句の羽畳む

孤舟

五郎太さん・・・多分一羽の小鳥でしょう。水面を少し泳ぎ、近くに飛んで来て羽を閉じる。その時ふと秋らしい水の匂いがした。水の匂ひ、羽畳むが綺麗です。

ゴダールは尊厳死らし秋夕焼け

五郎太

亜也さん・・・反骨と表裏一体の意思。

磯の香を軽やかに揚げ秋の宴

五郎太

ゆたかさん・・・「軽やかに揚げ」の表現で美味が感じられます。

秋澄むや小網神社に銭洗ふ

とみ子

康敏さん・・・日本橋の小網神社は、こぢんまりした神社だが、強運厄除けの神様として信仰を集めている。作者は神社内の「東京銭洗い弁天」で硬貨を洗った。清冷な水と「秋澄む」の取り合わせがよい。

あぜ道に深紅の花や早稲を刈る

ただしげ

くにおさん・・・早稲を刈った後は広々とした苧田になる。一抹の寂しさが漂う。そんな中に畔に深紅の花が咲き、華やぎを与えている。深紅の花は何だろう？

曼珠沙華だろうか？

雲走り顔を隠した十三夜

ただしげ

孤舟さん・・・今年の十月八日は空模様が不順で、折角月を上げたがやがて雲に隠れてしまった。

この寒さ冷酒切り替え爛をつけ

國護

ただしげさん・・・今年のように気温の変化が激しい秋、急に寒くなると熱爛が欲しくなる。この気持ち、よく理解できる。

※康敏さん・・・寒さ(冬)、冷酒(夏)、爛酒(冬)と季重なりです。それに「くだからくする」と原因結果を詠むのは理屈であって詩ではないとされます。「温め酒」という秋の季語があります。旧暦6月6日の重陽は寒暖の境目で、この日から酒を温めるとされま

す。御句の意味を一つの季語で表しています。「温め酒」で句作してみても。

刈り残る葡萄ににじむ日の疲れ

びん

作例「人肌といふはむづかし温め酒 滝春一」

琉球の古酒との出会い禁酒解く

盛雄

紀久男・・・泡盛を立ち飲みしてひっくり返ったこと有り。古酒はめったに手に入りません。まるやかで美味。禁酒解くのは当然です。

一点句

コスモスも我もゆれたり温さ待ち

雅夫

紀久男・・・季重なりですが、作者は心の温さを詠った由。誤解される向きがあるかと思えますので、別の表現を採ったら如何でしょうか。

今更に柿のやさしさを有難き

亜也

紀久男・・・晩秋の柿は旨く、デザートに最高。胃腸にも良いです。裏山に一本だけある柿の実が熟す時を、鳥達が狙っております。

嬌声に踊り子の四肢宙を舞ふ

盛雄

(宝塚にて)

紀久男・・・丸紅入社直後春の園遊会が宝塚で催行され、初めて大劇場でラインダンスを見た覚えがあります。最員の巳之助は体格が元宝塚スターの母親似です。



【青葉会予定】

令和四年十一月二十四日(木)

会場：三軒茶屋 しゃれなあど(世田谷区施設)

4階会議室

時間：十三時～十六時半

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：十一月二十二日(火)中。

◇ご参加のご意向、投句は今井宛Eメールか郵送、或いは星田メール宛お願い致します。

◇ご参加の方で三軒茶屋しゃれなあどは初めての方は星田(080-8870-8201)までお問い合わせください。ご説明致します。



青葉会報

一、秋麗かな日の午後、三茶しゃれなあどに、びんさん以下十名が出席、投句は天牛さんから15名選句のみは敏郎さんら七名と盛況。句評は各人見方は様々で将に百家争鳴のありさまでした。寄贈は啓子さん持参の清水(秋田)、千恵さんの蓬萊(飛騨高山)ただしげさんの名古屋両口屋是清の銘菓、國護さんの缶ビール、小生のおかきを賞味しつつ、丸紅の新聞全面広告「ワンピース」(若い人対象らしい。好感持てる)を回覧しながら五郎太さんの進行役で孤舟さん、とみ子さん、恵洲さん、健介さん、堂哉さん、規雄さんなど高得点者多く捌きにご苦労しておられました。

一、 関係者近詠

礼拝の高天井に鬼やんま	眞希子	西日中新築の家みな四角	陽亮
ひよこ小屋覆ふゴーヤの花盛り	全	幽かなる深夜の風鈴慄ろしき	全
友垣の夫婦それぞれ茄子の張り	全	天瓜粉叩かれてゐてまどろむ嬰(こ)	全
浜の蠅浜の読書を追ひ立つよ	全	わが胸の虚ろ貫く稲光	全

するすると鮎の骨抜く古稀の箸 弘子 汗拭かず曲尺使ふ宮大工 紀久男
 もう誰も居らぬ故郷鮎の箸 全 全 初秋や散髪すませ句会の座 全
 沈みては浮かび流るる青胡桃 全
 御旅所へ青笹竹のたかたかと 全
 ルドベキア別荘の戸閉ぢてをり 全

「森の座」十一月号（横澤放川選）

凶鑑手に追ひし野草や草の絮 盛雄 おことばを聞きつつ散髪終戦忌 健介
 終活の手引書難儀ちちろ鳴く 全 陸奥の神代も聞かず秋出水 全
 琉球の土産の古酒ぞ禁酒解く 全 席譲りはにかむ少年さやけしや 全
 職退きし記念の一樹柚子たわわ 全 秋出水禿頭交じるポランティア 紀久男
 爽やかや移住の友の黒びかり 全
 秋うらら好球必打の三冠王 全

「きさらぎ句会」九月

闇深く貴船の宿の牡丹鍋 允章
 祖母の味思い出したり零余子飯 全

二、 孤舟選者近詠

只管に生くるがよしと蟬時雨
 秋高し乗馬倶楽部の白き馬柵
 秋薔薇に脂粉のにはひありにけり
 小鳥来て森の喝采昂りぬ
 日を重ね影を重ねて曼珠沙華

令和四年 十一月 十二日

紀久男 記